

# 『更級日記』の中の東海道

— 国司が通った古代官道を辿る —

小林道子

## 1. はじめに

菅原孝標女《寛弘5年（1008） - 没年不詳》は平安時代の貴族の女性で本名は分からない。執筆した『更級日記』は上総介であった父・菅原孝標と少女時代を上総で過ごした彼女が、父の任期が終了した寛仁4年（1020）9月に上京するところから始まり、作者が53歳頃になるまでを綴った回想録である。

日記は①上洛の旅 ②京の暮らし ③宮仕え ④物詣で ⑤晩年 の5部から構成され、物語に憧れ夢見る少女だった作者は継母との別離や、乳母の死・姉の死などの身内の不幸を経験して現実の厳しさを知る。

33歳で橘俊通（父と同じ受領）と平凡な結婚をして出産する。夫の単身赴任や病死などを経て子供たちも独立し、孤独の中で信仰に救いを見出していく。

作者は、物語に夢中になり信心を疎かにしたことで不幸な晩年を迎えることになったと考え、人生を振り返るために日記を綴った。日記を執筆した時期は夫が死亡して2年後の康平3年（1060）以降と思われる。およそ170年を経て、藤原定家が写本した御物本が現存する。[資料1]

「更級日記」の書名は日記の中の「月も出でて 闇にくれたる姨捨に なにとて今宵 たづね来つらむ」と作者が詠んだ歌から付けられた。更級は信濃国の群名で、月の名所姨捨山があるところだ。

信濃国は夫の橘俊通の最後の赴任先であり、亡き夫を偲ぶ思いをこめて「更級日記」と付けられたのかも知れない。

以前わたしが住んでいた市原で、彼女は4年間暮らしていた。都生まれの少女が、東国でどのような日々を送っていたのか、また中流貴族である国司の家族にも興味を持った。

第1部の上総から京までの旅行記では我々の住む土地がどうであったか、人々はどのような暮らしをしていたのか当時の社会情勢や自然観察を知ることができる。

日記の記述は記憶違いや創作もあり、すべてが事実ではないが、人々の暮らしや不思議な伝説を今に残しているので、上京する途中に立ち寄った国々の様子や古代東海道の旅について考察したい。

[資料2、3]

## 2. 菅原孝標女の家族

父 菅原孝標 天禄3年（972 - 没年不詳）

菅原道真の嫡流5世の末裔で学者の家柄であった。17歳で父の資忠と死別するが28歳で蔵人となり、蔵人頭であった藤原行成の部下として活躍した。父の資忠や長男の定義が共に大学頭・文章博士であったのに、孝標は凡庸な人物であったか、学者としての能力に欠けていたのか、大学頭・文章博士のどちらにも任官しなかった。

春宮蔵人・右衛門大尉・檢非違使などの職を経て、寛仁元年（1017）に上総介に任官し、寛仁4

年（1020）からは10年以上無職であった。長元5年（1032）常陸介となり任期を終えた後、引退してしまう。官位は正五位下 作者が日記に描く孝標は気真面目で子供思いの父親である。

#### 母 藤原倫寧女

『蜻蛉日記』の作者である道綱母の異母妹にあたる。孝標が上総国に下向するときは京に留まった。常陸国にも同行せず、夫が常陸国から戻ると出家し同じ家の中で別居する。

#### 継母 高階成行女

孝標と結婚すると上総国に共に下向し、実母に変わり子供たちを養育した。帰京後、5歳の子を連れて孝標と離縁する。女房として後一条天皇中宮威子に出仕し上総大輔と呼ばれる。

#### 姉

作者が17歳のとき、二児を残して亡くなる。

#### 兄 菅原定義 長保4年（1002） - 康平7年（1064）

文章博士・大学頭に任ぜられ家業を再興した。永承4年（1049）には近国の国司、和泉守となる。菅原一門の頂点菅原氏長者（北野の長者）に就任。官位は従四位上 贈従一位。

#### 弟 基円

安楽寺（大宰府天満宮）別当

[資料4]

### 3. 平安時代の国司

天長3年（826）から親王任国制度が始まる。桓武・平城・嵯峨天皇のころは多くの皇子に恵まれ充てるべき官職が不足したため、親王の官職として親王任国の国司が充てられた。

親王任国守である親王は太守（たいしゅ）と称され、実際には赴任執務することを免除されたので、実務上の最高位は次官の介であった。親王任国制度が親王に対する経済的擁護であったとすれば大国であることが望ましく、上総・常陸・上野の3ヵ国を親王任国とした。

国司は一定の租税納入を果たすことが主な任務であった。10世紀頃には土地を対象に租税賦課する体制が確立した。平安中期以降知行国制度ができ、皇族や大貴族に一国を指定し国司推薦権を与えたため、大貴族は親族や家来を国司に任命し当国から莫大な収益を得た。

また国司は全面的に徴税と地方政治を任されたため、不正な利益を掠め取り私腹を肥やすものもいた。国司は国政を請け負うことになり『受領』と呼ばれ、郡司（在地有力者）との争いも多く中でも有名なものは尾張国の郡司・百姓らが尾張守の藤原元命（もとなが）を糾弾した事件である。

#### 「尾張国郡司百姓等解文」 永延2年（988）11月8日付け

「尾張国解文」ともいい、尾張国の郡司・百姓らが国守藤原元命（もとなが）の3年にわたる国政の非法・横暴を朝廷に訴え解任を要求した31カ条の上申文書である。

高い文章力から実際に郡司や百姓らの手によるものかは疑問とされ、京の学者や官人によって作成されたものと言われている。原本は残されていないが、鎌倉時代の写本が全文残る。

#### 訴えの内容

規定より多く正税や官物を徴収する・国衙の官人の給料を支払わない・元命の部下が人々から牛馬をうばった・元命の出勤怠慢・元命の子弟や郎党による狼藉・都合の悪い公文書を公布しない・運搬負担の強制・元命や身内による私利追求行為・寺などに対する公的支出を怠る・官物の横領・百姓から安価で絹を買い上げ、他国に高値で売りつけたことなど。

藤原元命はこの訴えにより翌永延3年（989）4月5日の除目で解任されたが、政府においてはそのまま地位を保ち続けその後も京都の吉田神社祭礼（吉田祭）の行事責任者代理を務めた。

中級貴族たちは国司任免を求めて、国司推薦権を持つ摂関家などの有力貴族に賄賂を贈った。長和5年（1016）藤原道長の屋敷「土御門殿」が火事で焼失しているが、摂関家に取り入ろうとする諸国の受領たちによって屋敷再建の労力・貢物が届けられ、2年足らずで以前にも勝る豪邸を築いた。

#### 『国務条々事』 「朝野群載」所収 漢文体

平安時代後期に成立した「朝野群載」は詩文や宣旨・官符などを集めて分類したものである。巻12に収められている『国務条々事』には新任国司が京を出立する時点から、赴任の道中、境迎いの儀、着任してからの儀式など国司として任国でなすべき事柄や心得が、42カ条にわたり記されている。

#### 『時範記』

承徳3年（1099）2月に平時範が因幡守として下向した際の道中の記事や、因幡国府に着いてから帰京するまでの41日間に行った国務に関する日記である。境迎いの儀や智頭郡の駅家で接待を受けたこと、総社での神拝、国内諸社を巡拝したことなどの記事がある。

## 4. 古代の交通制度

古代の律令国家は全国を五畿七道と呼ばれる地域に区分した。

五畿（畿内）は山城・大和・河内・和泉・摂津、七道は東海道・東山道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西海道である。平城京から伊賀国・伊勢国を経て尾張国へと至り、途中伊勢国で志摩国へも支路を分岐させていた。〔資料5〕

七道のひとつである東海道は当初、伊賀国・伊勢国・志摩国・尾張国・三河国・遠江国・駿河国・甲斐国・伊豆国・相模国・上総国・下総国・常陸国の13国であったが、養老2年（718）安房国が上総国から独立し、宝亀2年（771）には武蔵国が東山道から編入されて15国となった。

東海道はこれより相模国三浦半島の走水から安房国へ渡海するルートから、相模国・武蔵国・下総国・上総国を通るルートに変更された。

平安時代になると平安京から近江国・伊勢国を通るルートに変更される。15カ国を連絡する本路（終点は常陸国府）のほか伊賀路・志摩路・甲斐路・房総路の四支路と本路の終点の常陸国府から東山道に連絡する東山道連絡路が設けられた。

駅制は、中央と地方の間を情報伝達のために設けられた緊急通信制度で、中央から地方へ派遣される使者を送迎する伝馬制と共に、律令法に明記された交通制度の二本柱をなす。

駅家（うまや）は駅路に沿って30里（約16Km）ごとに配置され、中央政府の高官を接待し宿泊や食事の提供をした。（古代の1里は529m 30里が15.885Kmでほぼ16Km）

今の細かい注釈書の「令集解」には五畿七道のうち、山陽道と西海道の一部（都から大宰府）を大路（たいろ）東海道・東山道の主道を中路（ちゅうろ）その他を小路（しょうろ）とし、大路の駅家には20疋、中路の駅家には10疋、小路の駅家には5疋の駅馬（はゆま・えきば）が配備されたと記されている。

『延喜式』では東海道に55の駅家が置かれていたことが見え、東山道と重複する近江国の3駅と東山道連絡路の2駅を合わせると60駅が置かれた。

東海道本路の距離は617.7Kmで支路と連絡路を合わせると1030.4Kmになる。奈良時代の道幅は12mで、平安時代の道幅は6mを基本とした。

古代東海道は基本的に陸路をとったが、途中で多くの大河が存在するため浮橋（船橋）や渡船が置かれた。浮橋は舟を横に並べて岸から綱などで繋ぎとめて上に板を渡して通行したものである。

11世紀成立の『類聚三代格』によると、浮橋（船橋）は駿河国の富士川と相模国の鮎川（相模川）で造られていた。

渡船が置かれたのは武蔵・下総国境の住田川（隅田川）、下総国の太井川（江戸川）、武蔵国の石瀬河（多摩川）、遠江・駿河国境の大井川、駿河国の安倍川、三河国の飽海川（豊川）と矢作川、尾張国の草津渡（萱津）である。

常設の橋は少なく、川幅の狭い場所は歩いて渡った。向こう岸に渡る地点を渡し（渡り）と呼び、律令制下では民部省の管轄下にあった。

古代計画道路は律令政府の権威を示し、情報伝達や地方から中央への税（農産物や生産物）の輸送、国司の赴任と帰京を目的とする国家のための道路である。都と地方を直線で繋ぎ、住民の都合は全く考へることなく都まで最短で結ぶ道路であった。

10世紀末になると実質的に駅伝の制度は行き詰まり、荒廃する駅家も多く出てきた。11世紀には駅伝制も駅路も廃絶した。

当時の国司の旅は寺や民家に泊り、宿泊場所がなければテントを組み立て野宿した。また、仮屋と呼ばれる粗末な小屋で数日滞在することもあった。

旅の移動は輿や車（網代車一種の八葉車・人が曳く輦車）を使用し、峠越えには馬や人足を増やす必要があった。因幡堂縁起絵巻によると、寛弘2年（1005）因幡国に下向する橋行平は6人で担ぐ輿に乗っている。[資料6、7、8]

## 5. 更級日記 旅の行程

菅原孝標たちの旅は国司帰任という公務の旅であったため、官道（古代東海道）を通ったはずだが、すでに駅制は機能していなかったのか駅家の記述が全くない。しかし官道は国司の通行路として当時も利用されていただろう。国府近くを通ったなら立ち寄り、宿泊の手配や接待も受けたと思われる。

### 上総国 東路のはて（現代語訳）

東海道の果ての常陸国より、もっと奥の方（上総国）で育った人（作者）はどんなに野暮ったい感じだったろうに、どうしてそんな思いを起こしたのか、世の中に物語というものがあるそうだが、どうにかして読みたいと思いつけるようになった。

姉や継母が物語の話をしているのを聞いてますます読みたくなったが、大人たちは望むように暗記してくれないので、自分の身長と同じ薬師仏を造って、早く京に帰れますように、物語をたくさん見せて下さいますようにと仏さまに祈っているうち、13歳になる年に父の任期が終わり上京することになった。

---

孝標女は父親の赴任先の上総国で、10歳から13歳まで過ごした。継母から貴族の生活や和歌・読み書きを習い物語に興味を持つが、上総には書物もなく毎日退屈な日々を過ごしていた。姉や継母が物

語の話をしているのを聞いて一日も早く都に戻って物語が読みたいと願い、仏師に薬師仏を彫らせて上洛を願った。そして13歳になって、とうとう念願が叶い都に帰ることになった。

### 門出 (現代語訳)

9月3日、ひとまず門出をして「いまたち」という所に移ったがそこは垣根や塀もなく、粗末な茅葺きの家で雨戸もない。南は遠い野原の果てまで視界がひらけている。東西は海が近くて見事な景色だ。

9月15日、どしゃぶりの中、国境を越えて夜は下総国の「いかだ」という所に泊った。仮小屋が浮いてしまいそうなほど雨が降るので、恐くて眠れない。野中に丘のよう所があり、木が三本だけ立っている。雨に濡れたものを干して、後から国を出発する人たちを待つためそこで一日を過ごした。

---

孝標たち一行は方違のために、吉の方角にある「いまたち」という国司の新館に移った。当時は家から直接目的地には行かず、いったん他の場所に移る風習があった。

9月15日は暴風雨だったが、陰陽師がト占で出発日を決めていたので天気が悪くても変更しなかったのだろう。「いまたち」は日記では東西の海が近い場所にあったと記されている。

上総国府は『和名類聚抄』に市原郡に在りと書かれており、現在千葉県市原市の市原台地に置かれていた。推定地は郡本・総社・能満・市原の4ヶ所があげられている。

上総国と下総国の国境は上総国市原郡・下総国千葉郡の境で、村田川の下流域あたりは境川と呼ばれた時期もある。

一行は旧暦9月15日に上総国の国境(村田川および旧茂原街道)を越えて、下総国の「いかだ」に泊った。「いかだ」は千葉県池田郷と考えられている。

千葉県庁のある千葉市中央区市場町辺りは池田の池があり池田郷と呼ばれていた。駅制が機能していた頃、この場所に河曲駅が置かれていた。

日記の中で、夜が明けて見た『野中に丘たちたる所に ただ木ぞ三つたてる』と描写している場所は県立中央図書館か亥鼻公園あたりとされる。

### 下総国 (現代語訳)

17日早朝「いかだ」を出発した。昔、下総の国に真野の長者という人が住んでいたそう。匹布を千巻も万巻も織らせたり晒させたりしていた長者の家の跡があると聞いて、深い川を舟で渡った。昔の門がまだ残っているとのことで、見ると大きな柱が川の中に4本立っている。

その夜は「くろとの浜」という所に泊まる。そこは片方が小高く広々とした砂山で、白砂が遠くまで広がったところに松原があり、月がたいそう明るくて、風の音もしんみり心細く聞こえる。

---

一行は9月17日の早朝「いかだ」を出発して、麻布の生産で財をなした真野の長者の屋敷跡の話を聞きながら、深い川を渡る。

大きな台風や集中豪雨で大洪水に見舞われ、長者屋敷と麻布工房は流され一族も滅んで、昔の門が河の中に沈んでしまったという言い伝えがあった。

深い川は都川だろうか、千葉市の市街地を流れる都川は当時大きく北方に曲流していた。

17日に泊った「くろとの浜」は浮島駅があったとされる千葉市花見川区幕張、習志野市の津田沼か船橋市あたりと考えられている。「くろとの浜」は片方が広々とした砂山で、白砂が遠くまで広がったところに松原があると記述されている。[資料9]

下総国府は葛飾郡、現千葉縣市川市国府台にあり、国府近辺には井上駅が置かれ国府台からは井上の銘がある墨書土器が出土している。

下総国府から東京低地を横断して武蔵国へ続く古代官道ルートがあった。東武伊勢崎線「鐘ヶ淵」駅南側の道路・京成押上線「京成立石」駅の南側の道路・奥戸橋から「京成小岩」駅の南側を結ぶ直線道路が古代東海道の痕跡とされる。

## 武蔵国 (現代語訳)

翌日18日の朝「くろとの浜」を出発して、下総と武蔵との境にある太井川（江戸川）の上流の「まつさと」の渡し場に泊り、一晩中舟で荷物などを対岸に運んだ。

わたしの乳母は夫に先立たれ、国境の「まつさと」で出産したので、後から上京することになった。悲しくて乳母の産所を訪ねたいと思っていると、兄がわたしを馬に乗せて、乳母のところへ連れて行ってくれた。

皆は小屋に風が吹き込まないよう幕などを引きめぐらしているが、乳母の宿は夫がいないせいかひどく手抜きをした粗末なもので、屋根も苫（茅や菅で編んだもの）で一重におおっているだけだ。その屋根から月の光が家の中に射し込んで、乳母は紅の衣を上には掛けて辛そうに横になっていた。月の光に照らされている姿は乳母という身分の者にしては不釣り合いなほど、とても白くて美しい。可哀そうでこのまま帰りたくないと思ったが、兄が急いでわたしを連れて帰った。名残惜しくてやりきれない気分だ。

乳母の姿が目の前にちらついて悲しくて月の美しさも感じられず、がっかりして寝てしまった。

その翌朝19日、旅用の車を舟に乗せて、向う岸に降ろした。国府からはるばるの見送りに来た人々もここから、上総へ帰って行った。上京する私たちも立ち止まって泣いた。

武蔵の国に入ったが、特におもしろい景色も見えない。浜辺は白砂というわけでもなく、泥のようになっていて、紫草の生える所と聞いていた武蔵野も蘆や萩だけが高くはえて、馬に乗った人の持つ弓の先が見えないほど、先が高く茂っている。

その中を分けて進むと「たけしば」という寺があった。ずっと向こうには荘園の屋敷跡の礎石が残っていた。

ここはどのような所かと尋ねると「昔ここは竹芝という坂で、この国に住んでいた男が火焚き屋の番人として朝廷に務めていました。ある日のこと、この男が御殿の庭を掃除しながら窮屈な奉公に疲れたので、のんびりした故郷の様子を独り言でつぶやいていたら、これを聞いた帝の姫君が、この男の独り言を可哀そうに思って番人の住む国に行きたくなり、その国へ連れて行ってほしいと頼み込みました。男は姫君を背負って故郷の武蔵国に連れ帰りました。

追っ手が来ることを予想して勢多の橋の柱を一間ほど壊し、それを飛び越えて姫を背負い七日七夜かけて武蔵国に行き着きました。

驚いた帝と後は姫君をあちこち探させましたが、『武蔵国の衛士が着物に香をたきこめた姫君を背負って、風のように走って逃げて行きました。』と申し出た者があったので、この衛士の男を探しましたが見つかりません。きっと武蔵国へ行ったのだろうと使者が追いかけたのですが、勢多の橋は壊されていて、渡ることができません。使者は3ヶ月もかかって武蔵国に行きつき、衛士の男を見つけ出しますが、姫君

は使者の前で『この男の家が見たくて、自分が連れて行くよう命じたのです。こうなったのも自分がこの国に住むように前世からの因縁で定められていたのであろう。はやく帰って帝にこの事を申し上げてほしい』とおっしゃいました。

使者は都に上りそのことを帝に申し上げたところ、帝は『その男を罰しても今となつては姫君を取り返して都へ連れ帰すことも出来ない。竹芝の男に一生のあいだ武蔵国を任せ、租税も納めさせないことにし、姫宮にその国を預けさせよ』と宣旨が下されたので、男は家を内裏のように作って姫君を住ませました。

その後姫君が亡くなり、家を寺にしたのが竹芝寺なのです。姫君の産んだ子供は引き続き武蔵姓をもらっていたということです。この事件があつてから、火焚き屋には女を務めさせることになったそうです。」と語った。

---

翌朝18日「くろとの浜」を出発し、下総国と武蔵国の境になっている太井川（江戸川）上流の「まつさとの渡し場」に泊った。作者の誤認で太井川（江戸川）を下総と武蔵の国境としているが、古代では武蔵と下総の国境は隅田川であり、近世に入り江戸川に移った。

「まつさとの渡し」の場所は「まつさと」が松戸の古名「馬津 うまつと」の転訛したものと考えられ、解説書では千葉県松戸市としていた。しかし松戸は太井川から遠く上流まで台地の崖が続いているため渡河しにくい場所である。

舟で川を渡るため川幅の狭い上流の津に回ったとも考えられるが、水深が深いほうが渡りやすいのではないだろうか。最近では下総国府の対岸、江戸川区北小岩から、隅田に向かう古代官道が検出されているため「まつさと」は下総国府近辺に比定している。東京都葛飾区の中川左岸にある児童公園には「立石様」と呼ばれる石が存在する。この立石は古代東海道の道標と考えられている [資料10]

翌日19日の朝、太井川（江戸川）を渡る。渡河地点は国府台下の砂洲で、対岸は江戸川区北小岩付近である。江戸時代には「小岩・市川の渡し」があり、市川関所が置かれた。

武蔵国については泥のような砂浜に蘆や荻ばかりが高く生い茂り、馬に乗った人の弓が見えないほどで、枕ことばになっている紫草は一本も見えず面白くない景色だと記述している。

江戸時代初頭までは日比谷から丸の内にかけて、日比谷入江と呼ばれる海が入り込み、新橋付近から大手町回りまで波が打ち寄せていた。満潮時は海水が入り、干潮時には蘆や萱などが生い茂る湿地帯になった。

作者は武蔵国に入るとあすだ川（隅田川）を渡っているはずだが、あすだ川（隅田川）を武蔵国と相模国の国境と勘違いしたために記述がない。

一行は「隅田の渡し」で隅田川を渡し、豊島駅（谷中霊園付近）へ向かったと思われる。

あすだ川（隅田川）の渡河地点は墨田区墨田の白鬚橋付近とされる。この場所は近世「橋場の渡し」と言われていた。

豊島駅は湿地帯の多い東京低地を最短で横断し、下総国府へ連絡する重要な施設であった。

孝標たちは日比谷入江の岸边に沿って、芦や荻の生い茂る湿地帯を通り、三田付近で丘陵に上って竹芝寺に向かったようだ。 [資料11]

## 竹芝寺

竹芝寺の場所はさいたま市大宮区高鼻町の氷川神社神官屋敷説と現東京都港区三田の済海寺説がある。三田の済海寺は元和7年（1621）に越後長岡藩藩主家牧野氏の菩提寺として創建され、安政6年（1859）にフランス総領事館となった。済海寺の隣に下屋敷を構えていた上州沼田の土岐頼熙（よりおき）が寛延3年（1750）亀塚に石碑を建てた。亀塚碑には「武蔵国荏原郡竹芝郷に属し、更級日記の竹芝寺は隣の済海寺である」と刻まれているが、その根拠を示すものは無い。

## 竹芝伝説

武蔵国に入ると孝標女は竹芝の地名の由来を聞いた。かつて帝の姫君と親しくなった武蔵国出身の衛士が姫君を連れて武蔵国に逃げ帰り、追捕使に連れ戻されそうになった姫君は戻りたくないと言い張ったため、帝は仕方なく二人を許し、男は武蔵国の支配を任せられ姫君と幸せに暮らしたという伝承である。

武蔵氏は出雲系氏族に属する天孫系氏族で、武蔵国造家として代々足立郡司を務める一方で、氷川神社を祀る。神護景雲元年（767）に武蔵国足立郡人丈部（はせつかべ）不破麻呂ら一族が、恵美押勝の乱で軍功をあげ武蔵宿禰の姓を与えられ武蔵氏を名乗る。

武蔵竹芝は平安中期の豪族で、10世紀前半の平将門の乱を描いた「将門記」に登場する。その中では公務に忠実に励み民を慈しむ名郡司と評されるが、その竹芝が伝説と関係しているかは定かでない。

坂東の人々は国司による不当な税の取り立てに苦しんでいた。承平7年（937）年、富士山が大噴火し、その翌年大地震が起こるなど度重なる自然災害によって凶作と大飢饉に見舞われたが、国司たちは例年通り重い税を取り立てたので、農民たちは領地から逃げ出す者もいた。

天慶元年（937）2月武蔵国に武蔵権守興世王と武蔵介源経基がやってきて、足立郡司武蔵竹芝と政治をめぐり争っていた。ふたりは私腹を肥やすため違法に税を取り立てたため、武蔵竹芝はこれに立ち向かった。権守興世王は正式に任命された国守が武蔵国に至る前に強引に足立郡内に入ろうとしたが、前例がないため拒否したところ武力で強引に入国した。

将門はこの騒動を収めるため、武蔵国に向かった。興世王は竹芝と和解し、のちに将門のもとで参謀となる。源経基は和議に応じなかったため、竹芝の兵が経基の陣を取り囲んだ。

経基は将門たちが自分を討とうとしているのではないかと疑い、京に逃げ帰って朝廷に将門たちの謀反を訴えたことが平将門の乱の遠因となる。

竹芝の消息は興世王と源経基との揉め事以降消息不明となる。

武蔵竹芝は氷川神社の祭祀権を失ったが、竹芝の娘が菅原正好と結婚して、孫の菅原正範が氷川神社社務司を務めた。

一行は翌日竹芝寺を出発し、律令制のころから存在する「丸子の渡し場」で石瀬河（多摩川）を渡って、この先の中原街道から相模国に入る。

「丸子の渡し」の歴史は古く9世紀頃にまで遡ると言われている。「守子の渡し」と呼ばれていたのが訛って「丸子」となる。『延喜式』によると小高駅（川崎市高津区新作）から多摩川を渡り、大井駅（東京都品川区大井）に向かう古代東海道はこの「丸子の渡し」を渡ったと考えられる。

相州道（中原街道）は古代東海道と同じルートとされ、武蔵国と相模国を結ぶ街道として古くから存在し、江戸時代は脇往還として沿道の農産物の運搬や急ぎの旅人が利用した。



## 相模国 (現代語訳)

野山や蘆や荻の中をかき分けて歩くよりほかに何もなくて、武蔵と相模の国境を流れる「あすだ川」という川のほとりに出たが、そこは在五中将の「いざこと問はむ」と詠んだ渡し場である。中将の家集には「すみだ川」とある。舟で渡ってしまうと相模国になった。

「にしとみ」という所にある山は上手な絵が描いてある屏風をずらっと並べたようにすばらしい景色だ。片側は海で、浜の様子や寄せては返す波もとても素敵だ。

「もろこしが原」という所では砂がとても白い場所を2、3日かけて歩く。夏はなでしこが濃く薄く錦をひいたように咲くが、今は秋の終わりなので見られないという。しかし所々こぼれたように散らばって可憐な風情で咲いている。

「もろこしが原に大和撫子が咲いているなんて」などと、人々が面白がる。

足柄山という所は通り越すのに4、5日もかかった。老樹が繁って恐ろしく暗く、ようやく麓に辿り着いても空の景色もはっきり見えず木々が繁っていて、とても不気味だ。麓に泊ったら、月もなく暗い夜の闇に迷うようだ。するとそこに3人の遊女がどこからともなく出てきた。50歳ぐらいの人がひとり20歳と14、5歳だった。人々は庵の前に傘を広げさせて遊女を座らせた。

男の人たちが火を灯して見ると、20歳ぐらいの遊女は昔「こはた」という有名な遊女の孫だという。髪はとても長く、額髪もよく似合い色白でこぎれいなので、都へ連れて行って下仕えとしても良さそうだ人々は哀れがる。

声もよく澄んで、空に上るようで素晴らしい歌をうたう。人々はたいそう可哀そうに思って側に寄って興味を示し、西国の遊女はこうはいかないなどと言うのを聞いて「難波あたりの遊女に比べれば、そうはいきません。」と謙遜して上手にうたった。

見た目がきれいなうえに声までほかの人と比べようもなく見事にうたい、こんなにも恐ろしい山中を立ち去って行く遊女の姿を見て、人々はなごり惜しくて涙を流した。まして幼い自分はこの遊女に惹かれ、いつまでもここにいたい気がした。

翌朝、まだ夜も明けないうちに足柄山を越えた。麓でさえ恐ろしいのに、山中の恐ろしさは言いようもない。山が高く雲は足の下にあり、山の中腹あたりの木の下狭い場所に葵がたった三本ばかりあるのを「人里離れてこんな山中に生えていることだ」と人々はしみじみ思った。

水はその山中に三ヶ所だけ流れている。

---

ここで作者は武蔵国と相模国の国境をあすだ川（隅田川）と誤認しているが、武蔵と相模の国境は境川である。境川（高座川・片瀬川）は東京都町田市相原町から神奈川県大和市を経て、藤沢市の江の島付近で相模湾に注ぐ。

在五中将は在原業平のことで「名にしおはば いざ言問はむ都鳥 わが思ふ人はありやしやと」と業平が「伊勢物語」の中で、この歌を詠んだとされる。

古代東海道は箱根山北側にある足柄山を越えるルートだった。足柄山は当時、神奈川と静岡の境にある金時山の北方斜面一帯の連山を指した。

『日本紀略』によると、足柄路は延暦21年（802）の富士山噴火により塞がれたため、管荷（箱根）路が開かれたが翌年、旧に復した。

相模国「にしとみ」の場所は藤沢市西富と足柄下郡箱根町西土肥の説があるが、次に「もろこしが原」

の記述があるため、藤沢の西富遊行寺付近とする参考書が多い。ところが、藤沢市教育委員会発行の「神奈川の古代道」によると、西富という地名は明治7年（1874）に西村を西富に改称されたとある。なぜ明治になって西村を西富にしたのか、古名は西富だったのだろうか？現在の藤沢の西富付近からは海は全く見えない。当時の海岸線は内陸まで入り込んでいたのだろうか。

「もろこしが原」の地名は今も平塚市唐ヶ原がある。当時は神奈川県藤沢あたりから、神奈川県中郡大磯町を中心とする海岸を指した。

渡来人が5世紀頃集団で移り住み開拓した土地で、7世紀に高句麗からの亡命者である王族高麗若光たちが移住した所と推定される。

大磯丘陵には古代の遺跡が多く存在し、高麗山の南側の釜口古墳は高麗人の墳墓といわれており、横穴式の石室があり、奥の壁と天井は一枚岩を用いているという。珍しい青銅製散蓮華型小匙が出土している。

楊谷寺谷戸横穴墓群は高麗山の西側に位置し、7世紀初頭の年代を示す土師器や7世紀後半の須恵器の長頸瓶など、16個ほどの土器が出土している。県指定史跡で平面形態は方形・フラスコ形・逆台形などがある。他に王城山横穴墓群（多くの横穴に観音などの石仏が安置されている）・石切場横穴墓群（アーチ形や家形のものがあり、漆喰らしき白色顔料が残る）など、7世紀前半以降の遺跡が残る。

「足柄関」は昌泰2年（899）足柄峠に出没する上野国の強盗を取り締まる目的で、足柄峠東麓に設置された。相模国国司の過書（関所の通行許可書）で通行させたが関は機能せず、駿河国まで坂東の強盗が侵入した。

## 遊女（あそび）

一行が足柄山の麓（坂本）に泊ったとき、3人の遊女に出会った。遊女は古い時代には遊行女婦（うかれめ）と呼ばれ古代の国府や港付近にいた。国司が開く宴席で歌や舞を披露し賓客の接待をした。

平安時代には遊女（あそび）（あそめ）（あそびもの）と言ひ、主に歌舞などをして旅人の宿を訪れて旅情を慰めていた。傘を持ち歩いて、客があると傘を広げてその下で歌を歌った。宿や津など交通の要衝で歌舞と売春をする女たちは傀儡女（くぐつめ）と呼ばれた。

## 相模国府関連遺跡

平成16年平塚市四之宮で、8世紀前半の国庁脇殿に想定される大型建物が発見されたため、奈良・平安時代の国府が存在した可能性が高くなった。

湘南新道関連遺跡・坪ノ内遺跡第7地点からは大型の建物群や道路跡・鍛冶工房跡・役所の施設名が墨書された土器など、国府に関連する遺構や遺物が数多く発掘されている。

国分寺の多くは国府区域内か周辺に置かれたが、必ずしも同じ場所に存在するとは限らないことがわかったことと、平塚の遺構が、全国に国府が置かれた時期の8世紀前半から後半にかけてのものと判明したため、大住郡（平塚市四之宮）から余綾郡（大磯町国府本郷付近）へ移転の二遷説が有力になった。

一行は大磯付近から相模湾の海辺を南に進み、国府津付近から西へ向かい足柄峠を越えることになる。足柄山の山道を4、5日かけて進み駿河国に入った。

## 駿河国（現代語訳）

やっと足柄を越えて、関山（横走の関のある山）に泊まった。ここから駿河国だ。「横走の関」の傍らに岩壺という所があった。とても大きな四角い石の中に、穴が開いていてそこから湧き出る水がきれいで冷たいことこの上もない。

富士山はこの国にあり、自分の育った上総国では西の方に見えた山である。その山の様子は世に見られないほど特別な形をした山で、藍色を塗ったように雪は消えることなく積もっているの、色の濃い絹に白のあこめ（男子の束帯姿の内着で、単衣の上につけた短い丈のもの）を重ねて着たように見えて、山の頂きの少し平らになった所から煙が立ちのぼっている。夕暮れは火が燃えているのも見える。

「清見が関」は片方が海で、関所の役人が見張りをする建物があり、海の中まで柵がしてあった。海面には潮けむりが立ち上るのであろう、清見が関の波も高くなりそうだ。興味深いことである。

「田子の浦」は波が高く海岸を歩けないので、舟で向こう岸に着いた。「大井川」という渡し場があったが水が透明ではなく、米粉をすって濃くして流したように白い水が速く流れている。

富士川というのは富士山から流れ下る川である。駿河国の人「先年、あるところへ行ったときに、ひどく暑かったのでこの川のほとりで休みながらぼんやりしていると、川上から黄色いものが流れてきて何かにひっかかり止まったのを見ると、何か字が書いてある紙でした。取り上げてみると、黄色の紙に朱色で濃くきれいに書いてあったので、不思議に思って読んでみると、来年の国司に任命される国々の除目のことが全部書いてあり、この駿河国が来年は空席になっていましたが、そこにも新国司を定めてその名を記し、別にひとり加えて2名の名が記してありました。

不思議だ、意外だと思ひ大切にしまっていたが、翌年の除目にはこの紙に書かれていたのと少しも違わず、駿河守と書いてあった人が赴任したが、3ヶ月で死亡してその代わりに任命された人も、そばに書き添えてあった人だったのです。こんな不思議なことがあったのですよ。来年の任官のことなどは今年この富士山にたくさんの神が集まり、お決めになることなのだと思います。なんとも珍しいことです。」と語った。

---

関山は足柄峠の関で、静岡県駿東郡小山町竹之下のあたりだが関の所在は不明である。

作者は予言の川を富士川として富士川の源は富士山だとしているが、富士川は山梨県の釜無川と笛吹川が合流して、富士山の西側を通り駿河湾に注いでいる。

駿河国府は天武9年（680）に伊豆国を分離した際、駿河郡駿河郷（沼津市大岡付近）にあった国府を安倍郡（静岡県静岡市）に移した。現在の駿府城址を中心としたあたりである。

岩壺は駒門風穴のこととされ、1万年前の富士山の噴火で形成された溶岩洞窟である。日記に横走の関のそばに岩壺（駒門風穴）という所があったと記されている。

富士山の噴火は天応元年（781）以降16回の噴火が記録されている。貞観6年（864）の大噴火後も承平7年（937）と長保元年（999）、長元5年（1032）にも噴火していた。

800年から802年の延暦の噴火と864年から866年の貞観の噴火は大きな被害をもたらし被害は長期間・広範囲に及んだ。

作者は「富士山は煙が立ち、夕暮れになると火の燃え立つのが見えた」と記している。富士山は作者の育った上総国からは西の方角に見えていた。

「清見が関」は駿河国庵原郡（現静岡市清水区）にあった関所で、天武天皇在任中に設置された。海岸に山が迫っているため、東国の敵から駿河国や都方面を守るうえで格好の場所であった。

菅原一行が通ったときは関所番人の建物があり、海にも柵が設けてあったと記している。当時は東海道の関が機能しており、堅固な関所だった。

「田子の浦」は静岡県富士市南部の海浜で北に富士山を仰ぎ西に三保の松原を望み、古来東海道屈指の景勝地である。

日記には清見が関→田子の浦→大井川→富士川の順になっているが、実際に通ったのは富士川→田子の浦→大井川の順である。

### 遠江国 (現代語訳)

「沼尻」(場所不明)という所も無事に過ぎたあたりで、ひどい病気にかかって遠江に入った。歌枕で名高い「小夜の中山」などを越えたことも分からず、とても苦しいので天中川(天竜川)のほとりに仮屋を設けて、日夜過ごすうちによろやく回復した。冬も深くなっていたので河風が激しく吹き上げて、耐えられないほどの寒さだった。

その天竜川の渡し場を渡って「浜名の橋」に着いた。「浜名の橋」は4年前、東に下るときは丸太を渡してあったが、今回は跡形も無くなっていたので、舟で渡った。外海はとても波も高く、入江のあちこちの浮かぶ洲などに何もなく、ただ松原が茂っている中を波が寄せては返すのも、いろいろな玉のように見え、古歌(末の松山の歌)のように、松の梢を波が越えるように見えてとても趣がある。

---

「沼尻」を過ぎた辺りで、作者は病気になりそのまま遠江国に入った。歌枕で有名な「小夜の中山」を越えただろうが、病気だった作者は覚えていない。

「小夜の中山」は掛川市の日坂(につきか)峠と島田市金谷との間にある峠で、古今集などで歌われている。天竜川は当時天中川といい、今よりもかなり東の磐田原台地の西側を流れていた。大井川を渡った地点で遠江国に入るが、作者は富士川より前に大井川のことを記述している。

浜名湖の橋は一行が上総に下向したときには丸太の橋がかかっていたが、今回は跡形も無く、舟で渡ったとある。

遠江国府は豊田郡、現在の静岡県磐田市見附に置かれていた。

### 三河国から尾張国 (現代語訳)

それより上って行く先は「猪の鼻」という坂で、寂しそうな所を上ると三河国の「高師の浜」だという。有名な「八橋」という所は名前だけで、橋は跡かたもなく何の見どころもない。

「二村の山」の山中に泊った夜は大きな柿の木の下に庵を作ったので、一晩中庵の上に柿が落ちてきたのをみんなが拾った。「宮路の山」を越えるときは10月末なのに、紅葉がまだ散らないで盛りである。三河と尾張との国境にある「しかすがの渡り」は古歌に詠まれる通り、渡ろうか渡るまいかと思悩んでしまいそうで面白い。

尾張国の鳴海の浦を過ぎるときに、汐がどんどん満ちてきて、今夜鳴海の手前で宿をとるのも時間が中途半端で、汐が満ちてくれば通れなくなるので、みんな慌てて走り過ぎた。

---

「高師の浜」は豊橋市の東南で南は海、東は遠江国浜名郡につづく。この地に高師山があり歌枕として有名である。

「八橋」は愛知県知立市の東部、逢妻川（あいづまがわ）の南の地名で伊勢物語の東下りに、かきつばたの名所として詠まれたところであるが、作者は跡かたもなく何の見どころもないと記している。

「宮路の山」は近世東海道赤坂宿の西の山で豊川市赤坂町にあたり、古くから歌枕として詠まれている。

「二村の山」は三河国額田郡二村山で歌枕として知られた。

日記には高師の浜→八橋→二村山→宮路山→しかすがの渡りの順に記載しているが、実際に通過したのは高師の浜→しかすがの渡り→宮路山→八橋→二村山である。

三河国府は宝飯郡で、現在の豊川市白鳥町に置かれていた。

しかすがの渡りの「しかすが」はそうはいうものの、やはりさすがにという意味である。渡るか渡らないかと思い悩んだことから名付けられた。この渡りは三河と尾張の国境ではなく、三河国豊川の河口辺りの渡し場で、宮路山の東南にある。

「行けばあり 行かねば苦し しかすがの 渡りに来てぞ 思ひわづらふ」という中務集の歌をふまえて作者はなるほどと頷く。

「鳴海の浦」は鳴海潟と呼ばれる干潟である。

菅原孝標たちは木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）を渡らず東山道を進むルートを取り、尾張国から美濃国の国境の墨俣の渡りを目指した。東海道の本来のルートは伊勢国を通るが、鈴鹿峠越えや木曾三川の河口部の渡河は困難だったため、平安時代の国司や使者は美濃廻りのルートを取っていた。

尾張国府は中島郡、現在の愛知県稲沢市国府宮に置かれていた。

## 美濃国から近江国 （現代語訳）

尾張から美濃の国に入る墨俣の渡し場を渡って「野上」という所に着いた。そこに遊女たちが出てきて一晩中歌などをうたったので、足柄山にいた遊女のことが思い出されてしみじみ恋しいと思った。雪が降りひどく荒れたので何事も興味なく、不破の関、あつみ山（場所不明）などを越え近江国の息長という人の家に4、5日ほど泊った。

みつさかの山（場所不明）の麓では夜も昼もしくぐれて霰が降りしきり、日の光もはっきりせずうとうしかった。そこを出発して、犬上、神崎、野洲、栗太などをなんとなく過ぎた。

琵琶湖の水面がはるばると続いて、なで島（場所不明）・竹生島などが見えて大変趣がある。勢多の橋はすっかり壊れていて渡るのに苦労した。

---

尾張国と美濃国との国境の「墨俣の渡り」は木曾川と長良川の合流点で、早くから渡船の設備があった。ここから一行は東山道に入り「不破の関」に至る。

「野上」は壬申の乱で大海人皇子が野上行宮を置き、関ヶ原の戦いで徳川家康が最初に本陣を置いた場所で、軍事上・交通上の重要拠点であった。

「不破の関」は三関のひとつで岐阜県不破郡関ヶ原町に近江京の防衛上、東山道を押さえるため壬申の乱の後に設置されたが、菅原一行が通った当時にはすでに、関の機能は失われていた。

美濃国府は不破郡、現在の岐阜県不破郡垂井町府中に置かれていた。

古代の勢多橋は現在の瀬田の唐橋よりも80mほど下流に架けられていたが、日記には「勢多の橋はみんな壊れていて渡るのに苦労した」と記している。

近江国府は栗本郡、現在の滋賀県大津市大江に置かれていた。

## 息長氏

近江国に入り息長という人の家に泊ったとあるが、この息長氏は近江国坂田郡（滋賀県米原市）を本拠とした古代豪族で、製鉄や琵琶湖水運に携わった。息長氏と継体天皇は応神天皇の孫である意富富村（おおほど）王を共通とする同祖の関係にあったとされる。天武の八色姓では最高位の真人姓を賜る。記紀の伝承では皇族として王を名乗る。神功皇后（息長帯日売命）・応神天皇妃（息長真若中比売・おきながまわかなかつひめ）・敏達天皇皇后（息長広姫）・舒明天皇（息長足日広額・おきながたらしひひろぬか）など息長の名が付く。このように天皇や皇后の名に氏族名が含まれるのはこの氏族だけである。坂田郡の天野川流域には5世紀末から6世紀後半の息長古墳群があり、この地は古代東山道・北陸道の要衝であった。古墳時代や飛鳥時代にかけて湖北東部の広い地域を勢力とし、坂田郡司を歴任するが奈良・平安時代以降は有力者を出さなかった。

## 入京（現代語訳）

粟津（大津市南部）に滞在して、**12月2日**に京に入る。日が暮れてから京に到着するように、午後4時ごろ粟津を出発すると「逢坂の関」近くになって、山の並びに板囲いした上から一丈六尺の仏のまだ粗削りであったが、お顔だけが見えた。しみじみと人里離れて淋しそうにいられる仏だと思い、遠くを見ながら通り過ぎた。

たくさんの国々を通ってきたが、駿河国の清見が関と、この逢坂の関ほどの心に残る所はなかった。たいそう暗くなってから、三条の宮（一条天皇の皇女・修子内親王の御所）の西にある三条のわが家に着いた。

---

山の斜面に立つ仏像は寛仁4年（1020）には建設中だったが、作者が25年後の寛徳2年（1045）石山寺に参詣するためここを通りかかった時には仏像は完成していた。「昔見た景色は変わらないが、年月がこんなに過ぎ去ったことも感慨深く思われる」と記述している。石山寺縁起絵巻の3巻第3段は孝標女の「逢坂の関」にさしかかった場面が描かれている。[資料12]

「逢坂の関」は近江国と山城国の国境となっていた関所である。東海道と東山道の2本が逢坂の関を越えるため、交通の要となる重要な関で平安中期以降には三関のひとつであった。

大化2年（646）に初めて置かれた後、延暦14年（795）一旦廃止。斉衡4年（857）に再び関が設置された。

作者は最後に旅の感想として『たくさんの国々を通ってきたが、駿河国の「清見が関」と、この「逢坂の関」ほど心に残る所はなかった』と記述している。

三条の自宅は三条天皇譲位後の住まいで、天皇が亡くなってから売りに出された旧三条院であったという。菅原孝標は上総赴任中にこの邸宅を購入したと思われる。

京都市中京区の一町四方の広大な屋敷で、東隣の三条の宮は脩子内親王の御所であった。日記にはこの屋敷のことを「三条のわが家は広々と荒れた所で、これまで通り過ぎた山々にも劣らず、大きくて恐ろしい深山の木々のようで、ここが都の中とは思えない」と記述している。

## 6. おわりに

日記の中には駅家での食料の供給や宿の手配の記述が無く、駅制はすでに機能しなかったようだが、官道（古代東海道）は国司の通行路として利用されていたようだ。11世紀初頭の旅のルートは起伏の多い内陸部から海岸沿いを通るルートに変化していた。

3ヶ月（76日）の長旅は大量の荷物の運搬と女子供の同行があったこと、天竜川で孝標女の病気により先に進めなかったことや、近江の息長家での数日滞在、栗津でも方違いのため数日間滞在したことによるものと思われる。前国司の帰京は公務であり宿泊施設や食事などは国家から支給されるため、急ぐ必要もなかったのかも知れない。

荷物の中には国司の収入（国庫への納付・国衙の運営・土木灌漑などの地方事業費を差引いた分）以外に上総の特産品の麻布や干物・アワビ・海藻・塩などを報酬として持ち帰ったと考えられ、多くの私財を蓄えることができただろう。

日記は晩年に書かれたため記憶違いがあり地名も正確ではなく不明の場所も多いが、平安時代が富士山の活動期であったこと、勢多の橋が壊れていたことなど、当時の様子や自然に関することも多く書かれており、今も貴重な歴史史料となっている。

### 主な参考文献

更級日記（上・下）	関根慶子訳注	講談社学術文庫
更級日記	森美恵子訳	文芸社
旅の誕生	倉本一宏著	河出ブックス
王朝風土記	村井康彦著	角川選書
完全踏査 古代の道	木下良監修・武部健一著	吉川弘文館
東京低地の古代	熊野正也編	崙書房
掘り進められた神奈川の遺跡	かながわ考古学財団編	有隣堂
千葉県の歴史	石井進・宇野修一編	山川出版社
神奈川の古代道	藤沢市教育委員会編	藤沢市教育委員会